月の桂（かつら）

中国の故事

舊言月中有桂　有蟾蜍　故異書言月桂高五百丈
下有一人常斫之　樹創隨合
人姓呉名剛　西河人　學仙有過　謫令伐樹

（『酉陽雑俎』 段成式　唐代 八六〇年頃）

秋、金木犀（きんもくせい）の香る季節となりました。
日本の金木犀といえばオレンジ色ですが、これは日本独自に広まった変種のようで
原産地の中国において、桂花陳酒や桂花茶に使う花は主に黄色です。
中国の古い伝説では、月には金木犀の大木があると云われ「月の桂（かつら）」と呼ばれました。
日本では桂（かつら）は違う植物ですが、中国ではこの「桂」はモクセイのことです。

昔々、呉剛（ごごう）という男が、天の神様を怒らせてしまいました。
そして罰として「月の桂の木を切り倒すように」と命じられます。
この木は五百丈、つまり約一五〇〇メートルもある神木でした。
美しく光り輝き、夢のように甘い芳香を放つ金木犀です。

ところがこの不思議な木は、斧（おの）で切り付けてもすぐに傷が塞がってしまいます。
もともと怠け者の呉剛は、真面目に頑張ったり、さぼったりを繰り返すので
いつまで経ってもこの光り輝く金木犀を切り倒すことができません。
我々が空の月を眺めた時に、その様子が月の満ち欠けに見える、そんなお話です。

金木犀は江戸時代に、中国から日本へやってきたと考えられているのですが
なぜかそれより約千年前の万葉集にも、湯原王（ゆはらのおほきみ）の「月の桂」の歌があります。
当時の人々は、まだ見たこともない金木犀のお話を渡来人から聞いて
どんなに美しい樹木だろうと想像しながら、歌に詠んだのでしょうか。

目には見て　手には取らえぬ　月の内の
　桂のごとき　妹をいかにせむ

目には見えても　手に取ることのできない月の桂のように
　つかまえることができない貴女のことを、どうしたら良いだろうか。

（万葉集　巻四　相聞　六三二）

花物語　比田井 宗玉

株式会社 大田花き　背景画像『万葉集　尼崎本』（京都大学附属図書館所蔵）を改変